二〇一八年度

U国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一～三となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
1 2 3 4 5

（3と解答する場合）

一　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

私たちの日常生活は外部への依存性がたいへん高まっており、安全を外部の専門家に委ねる場面が増えている。こうした分業社会での安心というのはどういうこころの状態だろうか。

それは、自分が安全管理を委ねている各領域の専門家がしっかりとした仕事をしていて、それによって安全が確保されていると確信できている状態であるといえる。

スーパーで購入したお惣菜の調理人が、不衛生な調理場で腐りかけの食材を使っているのでは、という思いを抱いたりすることなく、これから乗ろうとする電車の運転手が飲酒しているのではないか、という思いを抱いたりすることなく、あるいは、自分の住んでいるマンションの耐震性や耐火性が低いのではないか、という思いを抱いたりすることのない状態が、安心した状態であるといえる。これらは、調理人、運転手、建築士などそれぞれの領域の専門家の仕事を信頼している状態と言い換えることができる。実際に、企業や行政が「安心」ということばをキャッチフレーズの一部として掲げるとき、それを「信頼」と読み替えても、そのまま意味が通じることが多い。多くの場合、(1)安心と信頼は同義なのである。

なぜ、安心が信頼と読み替えられるのかを、もう少し別の観点から考えてみよう。

本来、人間にとって最大の脅威は自然であった。洪水や日照りといった自然現象は直接、多くの人命を奪ってきた。こういった自然現象に対抗し、ダメージを抑えるために、さまざまな工夫が生み出されて発展してきた。それが文明であり、科学技術であった。築堤や灌漑などの土木工学的技術がその一例である。そして、それらの技術が有効性を発揮すれば、暴風雨がやってきても被害は抑えられるようになったし、少々の期間、雨が降らなくとも、農作物への打撃を小さくすることができるようになった。

(2)こうなると、人びとが懸念する対象は自然現象そのものだけではなく、その脅威に対抗するための技術の準備が適切かどうか、即ちリスクマネジメントそのものが懸念の対象として加わってくることになる。そして、自然

の脅威に対抗するための技術を運用する専門家が十分に高い技術力を持って、一生懸命業務に励んでいると確信できれば、自分たちは護られていて大丈夫と安心できるだろう。逆に、技術専門家の力量が不十分であるとか、あるいは、まじめに業務に励んでいないと感じると、安心はできなくなる。

リスクマネジメントの専門家が信頼できれば安心していられるし、信頼できなければ不安を抱くということである。これは、自然の脅威を抑える技術の、直接的な有効性をめぐる安心の問題であるといえる。

一方、これとは少し違ったかたちで信頼が安心に結びつく図式もある。それは、自然災害を抑えるための技術が副作用をもつため、元の災害に関しては高い安全をもたらしているにもかかわらず、その技術が別方面でリスクを生み出すというケースである。これはリスク間のトレードオフの問題と呼ばれる。

たとえば、私たちは水なしでは生きていくことはできないが、一方、飲料水が細菌などで汚染されていると致死的な感染症の流行を招くことになる。そのような事態を防ぐために、水道水は殺菌されて供給されており、日本では飲料水を原因とする伝染病の流行はなくなった。しかし、浄水時の塩素利用は発ガン物質であるトリハロメタン類を発生させる。この副産物として生成されるトリハロメタンをはじめとしたさまざまな有害物質が、水道を運営している機関によってしっかりと制御されていると思うことができなければ、私たちは安心して水道水を飲むことができなくなる。

保存料をはじめとする食品添加物に対する不安も同様である。保存料は食物の腐敗を防ぐことを通して食中毒の発生を減らすことに(イ)コウケンしている。時間経過に伴う食品中の細菌の増殖という自然現象に対抗して、食の安全性を高める技術が保存料なのである。

しかしながら、科学的に合成された食品添加物は危険であるという否定的な印象も消費者に根強い。少しずつでも、長期間にわたって(ロ)セッシュし続けると身体に悪い影響をもたらすという意見がそれである。

安全上問題のない許容一日セッシュ量という安全基準が定められているといっても、「安全基準はしょせん食品業者の利益にかなうよう作られている」とか、「食品業者が基準など守らずに大量の添加物を使用していても、消

費者にはわからない」と消費者が思い、リスク管理にあたる行政や企業を信じられないと、安心して添加物を利用した食品を食べることはできない。その結果、一部の消費者は「無添加」や「無農薬」といったラベルに飛びつくことになる。そういった人たちにとっては、添加物や農薬といった科学技術を使っていないことが、(3)リスク管理責任者への信頼問題を回避し、安心を得る道筋になっているようである。

以上の水道水の殺菌や保存料の利用は、□という事例であった。

さらに別の面から今日の科学技術をとらえると、利便性や快適性をもたらすための技術が脅威として意識され、その技術の管理をめぐる信頼の欠如が人びとを不安にしていることも多い。その典型的な例が原子力技術の利用であろう。

今日でも自然は大きな脅威であり続けるのだけれども、人びとの意識の上では、技術利用をはじめとする人為的な活動が、安全を破壊する大きな原因と考えられるようになってきている。そして、(4)人為的な営みであるが故に、それぞれに関係する〝人〟への信頼が、自分の安全がまもられていると感じるこころの状態、すなわち、安心を左右することになっているのである。

（中谷内一也『安全。でも、安心できない…　―信頼をめぐる心理学』による）

問

(A)　線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書（かいしょ）で記すこと）

(B)　線部(1)について。このようにいえる理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　企業や行政は、安心と専門家への信頼を同じ意味に用いているから。

2　外部の専門家への依存性が高まれば、安心も信頼も揺らぐから。

3　安全が安心を生み出し、その結果、専門家への信頼が生まれるから。
4　安心とは、専門家による安全管理を信頼することであるから。
5　分業社会においては安心がなく、専門家も十分に信頼できないから。

(C)　――――線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　自然の脅威を科学技術である程度抑えられるようになると
2　自然現象が人間にさほどの被害をもたらさなくなると
3　技術専門家の力量を十分に信頼できなくなってしまうと
4　安心が信頼と安易に読み替えられるようになると
5　自然現象の影響を受けやすい農業の生産性が向上すると

(D)　――――線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　行政や企業の専門家によるリスク管理を消費者は検証できないこと。
2　「無添加」や「無農薬」といったラベルもただちには信頼できないこと。
3　科学技術の管理者に対する信頼が安心の前提になってしまうこと。
4　リスク管理者が科学技術を使っていないといっても信頼できないこと。
5　安心とリスク管理者への信頼がトレードオフの関係に立つこと。

(E)　空欄 [　　] にはどのような表現を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　生存に必要な物質が、十分に供給されないおそれがある
2　リスクを抑えるための科学技術が、むしろこれを高める
3　ある災害を抑えるための技術が、別のリスクを伴う
4　科学技術のもつ有害性が、企業により隠蔽(いんぺい)される

5　安心を求める行動が、必ずしも安全をもたらさない

(F)　――――線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　客観的な存在である自然現象と異なり、人は主観性に左右されるが故に

2　技術を管理する者の力量や態度によってリスクが大きく異なるが故に

3　人の力を超えた自然現象と異なり、人の行動は制御可能であるが故に

4　分野によってはリスク管理の手段が十分に機械化されていないが故に

5　リスク管理者は往々にして安全より有用性を追求しがちであるが故に

(G)　次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　私たちの日常生活は、今後もいっそう外部への依存性を高めていくであろう。

ロ　分業社会とは、多くの領域において専門家に安全管理を委ねている社会である。

ハ　科学技術の発展により、もはや自然は脅威ではなくなっている。

ニ　多くの人々は技術の有用性よりも副作用のほうを重視しがちである。

ホ　利便性をもたらすための技術そのものが脅威として認識されることもある。

二　左の文章は、大学教授であった筆者がその研究のために一年間の海外生活を送った際の経緯や思索についてまとめたものである。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

なぜ今、そしてどうして私が、四百年以上も前の天正少年使節の話などを書くのだろう。

日本では信長がその権力の絶頂で明智光秀に討たれ、秀吉が天下をとって全国統一をなしとげようとしていたころに、九州のキリシタン大名三人がヨーロッパに派遣した四人の少年は正式な使節として遠く海をわたっていた。彼らは、十六世紀の世界地図をまたぎ、東西の歴史をゆり動かしたすべての土地をその足で踏み、すべての人間を、その目で見、その声を聞いたのである！　そのとき日本人がどれほど世界の人びとともにあったかということを彼らの物語は私たちに教えてくれる。そして、その後、日本が世界からどれほど隔てられてしまったかも。

私は一九九五年、ちょうど日本の敗戦から五十年たった年に、大学を一年休んでしばらくものを考えることにした。敗戦の年に十歳だった私にとって、戦後の五十年めとは、自分の人生や、日本の運命について考えなくてはならない節目の年に見えたのである。戦後、数多くの日本の若者たちが、世界に取り残され、孤立していた日本を変えようとして、西欧の科学や文化を吸収し、それを日本に持ち帰り、日本を世界のなかに置くためにその人生を賭けてきた。毎年、何艘の船が向学の精神をもった若者を満載して神戸や横浜から西欧に向けて帆をあげただろう。一九六〇年代までは貧しい学生はみな船でヨーロッパに行っていたのである。一九六一年に横浜を旅立った私もそのなかのひとりだった。

私は研究の土地としてローマを、研究のテーマとしてカトリック美術を選んだ。焼跡からじゅうぶんに立ち直っていなかった貧しい日本から来た私には、壮麗なローマの都市はまばゆいばかりの栄光に満ちていた。蒼白のサン・ピエトロ大聖堂、宇宙的なミケランジェロの天井画の下で、うちのめされたまま呻吟した私は、自分をかぎりなく矮小な、かぎりなく貧しいものと感じた。最初私はカラヴァッジョを研究しに行ったのだが、ヴァティ

カンでミケランジェロを見てしまったので、それに圧倒されてしまった。

それから三十数年、私はミケランジェロと格闘し、彼を理解し、彼の芸術をわがものと思うために研究した。そして一九九五年、敗戦の五十年め、ある夜、私はこういう声を内心に聞いた。「東洋の女であるおまえにとって、西洋の男であるミケランジェロがなんだというのか？」

ミケランジェロをいくら研究しても、私は「西洋美術を理解する東洋人の女」であるにすぎない。それまでは無我夢中だった。その結果、私はミケランジェロの本質がわかってきていた。まるで年来の知己のように彼のことがわかってきた。だが、そのことがとてもむなしかった。私と彼をつなぐものがなにもないからだった。なぜなら、彼は白人男性で、十六世紀のイタリア人であり、私は現代の日本人だからだ。

日本人として西洋と日本を結ぶことを研究したい。究極、この今の私と結びつくことを研究したい。そのテーマはいったいなにか。それがわからなかった。そして自分のほんとうのテーマを探すために大学に一年間の休学を申し出たのである。

そのとき、一九六一年に横浜から船に乗ってマルセイユまで行った最初の外国旅行の強烈な体験が、無意識の蓋をあけたように復活してきた。この船はフランスの郵船で、地中海へ一ヶ月の船旅を続けた。私が知ったのは、日本がヨーロッパからとても遠いということだった。それだけではない。日本とヨーロッパのあいだには、いくつものフオン(イ)な海、いくつもの、荒涼とした灼熱のヨーロッパ植民地が横たわっていたのだ。

東アジアの小国に生まれながら、西欧型知識人の環境と教育によって、イタリア・ルネサンスをはじめとする西欧文化をわがものと思い、奢り高ぶっていたが、じつは世界などなにひとつ知りはしない。東アジアについても東南アジアについても、アフリカについても、近東についても、なにもなにひとつ知ってはいない。

船のなかでは、フランス語を流暢に操るフランス政府留学生がおおぜいいて、客室の世話をするコルシカ人のメートル・ドテル（客室主任）は彼らを尊敬し、名誉白人のように扱っていた。彼はコルシカ島がイタリア領であったことを誇っていた（自分をナポレオンの生まれ変わりだと言っていたが）。私がイタリア語を話すので、私

も名誉白人の仲間に入れていた。彼は、香港から質素な身なりの中国の少女が私と同室になったことをひどく詫びた。むろん、私もひどくいやな気分で、一日部屋に帰らないことが多かった。

あるとき、彼女は、私が寝過ごして朝食を食べそこねるのではないかと心配して私をゆり起こした。私は英語もフランス語もイタリア語も通じないこの中国娘に辟易して、紙片にでたらめな漢文で「われ眠りを欲す」と書いた。彼女は大笑いをして紙片をとり、「わが名は黄青霞」と書いた。私は起きて彼女を見たが、私たちがとてもよく似ていることにそのときはじめて気づいた。「われは香港の祖母のもとを出て今サイゴンの父母のもとへ行く。汝いずくより来たり、いずくへ行かんと欲するや」。「われは日本より来たり、ローマへ行かんと欲す。かしこにて学を修めることを願う」。青霞は私の肩を叩いて紙片を見せた。「われ汝の成功を祈る」

サイゴンで黄青霞は手をふって降りていった。メートル・ドテルは犬を追っ払うようなしぐさで、「マドマゼル、追っ払いましたよ！」と言った。でも、私は傷ついた。青霞は私だったからだ。まぎれもなく私は黄青霞の「仲間」、「黄色い」東アジア人なのだ。(1) その日から私は名誉白人の仲間には入らなかった。この経験を私はひそかに、「わが心の黄青霞」と呼んでいた。(2) そして筆談の紙片をたいせつにもっていた。でもそのときは、それが自分にとってどういう意味があるのかをわかっていなかった。

最初の留学から三十四年後、一九九五年に私はふたたびヴァティカンにいた。こんどは「東アジアへのキリスト教布教についての第一次資料」を探しにだった。最初はキリシタンの美術について調べていたが、しだいに、天正少年使節についての文書がとても多いことがわかった。それを読んでいると、それに引きつけられ、ほかのことが考えられなくなった。少年使節が聖天使城のそばを通ってローマじゅうのカンコ(ロ)とファンファーレに迎えられ、大砲の響きが町をゆるがすところでは、思わず興奮した。なぜならこの図書館からはその聖天使城が太陽の光に照りはえて見えたからである。

しかし、聖天使城の白昼夢は、そのまま夢に終わりそうだった。多くの史料をかかえたまま、大学での業務に追われて、そのまま五年が過ぎた。退官して学生たちへの義務を終えたら、こんどは聖天使城の近くに部屋を借

りようと思っていた。奇蹟的に、目の前に聖天使城が見えるルネサンス時代のパラッツォ（建物）を借りることができた。しかし、そのときには、少年使節をめぐる世界の物語はただの回顧ではなくなっていた。二十一世紀の最初の一年は、平和な世紀を予告しはしなかった。それどころか、異なった宗教、異なった言語、異なった文化のあいだで、今や地球を破壊しかねない戦争が起こったのである。

この世紀は、十六世紀にはじまる、世界を支配する欧米の強大な力と、これと拮抗する異なった宗教と文化の抗争が最終局面を迎える世紀になるだろう。人類は異なった文化のあいだの平和共存の叡知を見いだすことができるだろうか。それとも争い続けるのだろうか？

私はずいぶん旅をしてきた。でもこれでほんとうに私がやりたかったこと、知りたかったことが書けた。この主人公は私と無縁ではなかった。彼らは描かれたばかりのミケランジェロの祭壇画を仰ぎ見、青年カラヴァッジョが歩いた町を歩いたのだ。ローマの輝く空の下にいた四人の少年のことを書くことは、まるで私の人生を書くような思いであった。(3)島国日本を出て広大な異文化の世界を行く船の旅はあらゆる意味で私の生涯の転換点であった。

（若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ―天正少年使節と世界帝国』による）

問

(A) ═══線部(イ)、(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B) ▌線部の読みを平仮名・現代仮名遣いで記せ。

(C) ――線部(1)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「名誉白人」の仲間でいることは、友情が芽生えた黄青霞に対する裏切りであると感じたから。

2 同じ東アジア人でありながら、偏見をもつ側に加担し優越感を抱いていた自分を恥じたから。

3　メートル・ドテルの黄青霞に対する非道な仕打ちに、傷つくとともに激しい憤りを覚えたから。
4　「名誉白人」の資格をもっているのは、フランス語を流暢に操る留学生だけだと気づいたから。
5　「黄色い」東アジア人である自分が、「名誉白人」として振る舞うことの欺瞞に気づいたから。

(D)　――線部(2)について。「今」の「私」は筆談の紙片にどのような意味があったと考えているか。その説明として適当でないものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　「名誉白人」として扱われなくとも、卑屈にならない黄青霞の生きざまを感じさせてくれるものだった。
2　さまざまなことを知った一ヶ月の船旅の中でも特に重要な出来事を象徴するものだった。
3　天正少年使節という、留学先での自分の研究の主題が定まる契機となったものだった。
4　それまで嫌悪を感じていた中国の娘と心を通わすことができたと思える記念のものだった。
5　希望と不安とに満ちた、ヨーロッパでの留学生活に励ましを与えてくれるものだった。

(E)　――線部(3)について。この転換点の説明として適当でないものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　西欧文化をわがものと思い奢り高ぶっていたが、じつは世界をなにも知らないと気づいたこと。
2　イタリア語を学び身近に感じていたヨーロッパが、じつは日本からとても遠いと知ったこと。
3　日本とヨーロッパだけを意識してきた「私」がアジアやアフリカ、近東の存在を実感したこと。
4　英語もフランス語もイタリア語も通じない中国の娘と出会い、生涯忘れられない経験をしたこと。
5　西欧型知識人との交わりから、彼らには東アジアの人間に対する根深い偏見があると知ったこと。

(F)　「私」が四百年以上前の天正少年使節を研究したのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　戦後五十年めという節目の年にこそ、考えるべきテーマだから。
2　西洋と日本を結ぶのみならず、現代を生きる「私」とも結びつくテーマだから。
3　ローマの図書館で見つけた第一次資料が大きな意味をもつテーマだから。

4　ミケランジェロは、無我夢中で研究してもむなしいテーマだから。
5　遠く海をわたった少年たちが、昔の自分に重なるテーマだから。

(G)　次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ　「私」はちょうど日本の敗戦から五十年の年に、留学時代の懐かしい思い出をたどる旅に出た。
ロ　天正少年使節は、異なる文化、異なる宗教間の抗争と共存とを考える上で大きな示唆を与えてくれる。
ハ　日本とヨーロッパは、地理的に遠いが、留学前の「私」はルネサンス文化に親しみを覚えていた。
ニ　黄青霞と「私」は、船旅の目的地は異なったが、同じこころざしをもつ仲間だった。
ホ　「私」が天正少年使節の話を書くのは、二十一世紀の最初の年に起きた破壊的な出来事ゆえである。

三　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

光明山（注1）といふ山寺に老尼ありけり。(1)いかなるにや、日吉（ひよし）（注2）つきなやまし給ひて、さまざまの託宣ども聞えける時、ある僧来あひて、尼の身にうちあはず、(2)心づきなくおぼえけるうへ、奈良のかたには、山王（注3）いとあがめ奉らぬならひにて、(3)こころみむと思ひて、この尼に向ひていふやう、「まことに大明神あらはれ給ふならば、わが申さむこと、はからひのたまはせよ。われ、極楽を願ふ志深く侍り。いづれの行（ぎやう）か、必ず往生の業（ごふ）となり侍るべき。このこと凡夫の暗き心に、(4)はからひがたくなむ侍る」と申す。

尼いふやう、「汝、われをこころみむとする心ざし、(5)めざましけれども、なほざりにても、往生の業とて問はむこと、いかでか教へざらむ。所詮は、行はなににてもあれ、衆生の宿執（しゆしやうしゆくしふ）（注4）、さまざまなれば、仏の御教へもまたさまざまなり。(6)いづれもおろかならず。さして、そのことと定めがたし。信をいたし、功をつむぞ貴かるべき。ただし、このことにいづれの行にも、必ず具すべきこと二つあり。信ずべきならば、いはむ」とのたまへば、この僧思ふやう、(7)なにごとのことかはと、なほざりがてらにいひ出したりつるを、かくげにげにしく、はからひのたまはするに、(8)貴くなりて、「われ、もとより西方（注5）の行者なり。早く承りて、深く信ずべし」と申す。

重ねて教へ給ふ。(9)「このことといふは、慈悲と質直（注6）となり。これを具せざれば、いづれの行を勤むとも、往生を遂ぐること、きはめてかたし」（10）とのたまふ。

僧、掌（たなごころ）を合せて、「この二つを具せむこと、かたく侍り。(11)いかがつかまつらむ」と申しければ、「二つ具せむこと、なほかたくは、せめて慈悲はおろそかなりとも、質直ならむと思へ。心うるはしからずして、浄土に生るること、［　　］あるまじ」とぞ仰せられける。

（『十訓抄』による）

（注）1　光明山といふ山寺――山城国の南部にかつて存在した光明山寺。奈良の東大寺の末寺であった。
2　日吉つきなやまし給ひて――日吉は比叡山の守護神である日吉山王権現（日吉大明神）。それが老尼に取りついたことを意味する。
3　山王――日吉山王権現のこと。
4　宿執――前世からの執着。
5　西方の行者――西方極楽浄土への往生を願う修行者。
6　質直――質朴で正直なこと。飾り気がなくまじめなこと。

問

(A)　――線部(1)の文法的説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　「いかなる」は形容動詞、「に」は完了の助動詞、「や」は係助詞
2　「いかなる」は形容動詞、「に」は断定の助動詞、「や」は係助詞
3　「いかなるに」は副詞、「や」は係助詞
4　「いかなる」は動詞、「に」は完了の助動詞、「や」は終助詞
5　「いか」は副詞、「なる」は動詞、「に」は断定の助動詞、「や」は終助詞

(B)　――線部(2)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　待ち遠しく　2　気の毒に　3　気丈に　4　気にくわなく　5　思いがけず

(C)　――線部(3)について。何を確かめるために「こころみむ」としているのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　本当に日吉山王権現は女性を救ってくれるのか
2　本当に奈良では日吉山王権現を信仰していないのか
3　本当に老尼は日吉山王権現を信仰していないのか

4　本当に老尼は日吉山王権現によって苦しんでいるのか
5　本当に老尼を介して日吉山王権現が託宣を下しているのか

(D)　――線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　納得できないことでございます　　2　実践できないことでございます
3　見定めにくいことでございます　　4　助言しにくいことでございます
5　堪えきれないことでございます

(E)　――線部(5)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　不快なことではあるが　　2　痛快なことではあるが
3　慎重なことではあるが　　4　丁重なことではあるが
5　軽率なことではあるが

(F)　――線部(6)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　仏はみな凡夫を往生に導く力をもつ　　2　いかなる執着も簡単には捨てられない
3　どの修行もいいかげんなことではない　　4　いかなる教えにも確かな意味がある
5　誰一人として劣った人間などいない

(G)　――線部(7)について。僧がこのように考えていた理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　託宣の真意の深刻さに気づいていなかったから　　2　尼の態度を崇敬の念をもって見ていたから
3　日吉山王権現を心から尊崇していたから　　4　尼の偽善的な言葉を寛容に受け止めていたから
5　尼に日吉山王権現が取りついたことを信じていなかったから

(H)　――線部(8)について。僧がこのような気持ちになったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　老尼だけではなく僧にも日吉山王権現が取りついたから
2　往生について語る老尼の言葉が道理に適っていたから
3　極楽往生を願う行者としての自己を回復したから
4　往生の条件について老尼と同じ見解だとわかったから
5　抱いていた疑問を老尼が次々と解決したから

(I)　――線部(9)について。「このこと」とは何を指すか。その内容にあたる本文中の語句として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　凡夫の暗き心　　2　衆生の宿執　　3　仏の御教へ
4　必ず具すべきこと　　5　浄土に生るること

(J)　――線部(10)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(K)　――線部(11)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　私をどのようにお導きになるのでしょうか　　2　私をどうして困らせるのでしょうか
3　私はどうなってしまったのでしょうか　　4　私はこれからどうなるのでしょうか
5　私はどうしたらよろしいのでしょうか

(L)　空欄［　　］に入る言葉として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　いかにも　　2　いかばかり　　3　いかにや
4　いかがは　　5　いかなれば